

# 黒人の文学的イメージの解放

——「大農園文学の伝統」に対する黒人作家の戦い——

安部大成

## 1

短篇という文学型式に黒人が描かれるようになるのは、主として1870年代の終りから1880年代の初め頃に文学活動を始めたジョージ・ワシントン・ケイブル、ジョエル・チャンドラ・ハリス、トーマス・ネルソン・ペイジ等の南部作家によってである。

それは南部における地方文学の勃興とも重複するが、特に南北戦争後10年を経て詩の分野に復興した「大農園文学の伝統」<sup>(1)</sup> プランテーション・トラディションの短篇分野における蘇生によるものである。そして、注目する必要があるのは、この文学伝統を踏まえて創出された黒人の人間像は当時の南部の政治、経済の動向と切っても切れない関係にあることである。

人種問題において進歩的で、開明的であったケイブルは南部の政治、経済の動向に批判的であり、その点で彼の描く黒人は他の南部作家のものと異なるが、やがて東部へ立ち退いてしまうので、ハリスとペイジがロマンティズムとリアリズムの軽重、大農園制へのアプローチ、黒人描写の側面等によって、その作品に相異を提してはいるが、黒人を見る眼においては基本的に同じ立場にあって、この文学伝統の双壁として、他の作家に影響を及ぼし、いずれ類型化されることになる黒人像を創出し、流布させていく。

彼等の作家活動が盛んであった1880年代は黒人を再び南北戦争前の状態に置き、白人の支配する南部を建設するために、黒人の選挙権、公民権が強く制限

され、リンチ殺人による脅迫も伴って、黒人の社会生活はひどく圧迫されていた。

1876年の「ヘイズ＝ティルドンの妥協」によって、南部から最後の連邦政府軍が撤退し、黒人に対する処遇が完全に南部の手に委ねられると、奴隷制を支え、またこの制度下に発展した黒人に対する南部のイデオロギーは政治、経済の面で蘇り、社会生活の面で生きていた慣習は屈服への反動を伴って一挙に表面化し、個人の領域に損なわれることなく生きていた観念は活路を見い出してこれに呼応するのであった。

アフリカ人は決して一人前に成長することのない、永遠の子供である、とか彼等は残虐でどう猛な野獣である、というかつて奴隷制擁護論の背骨となった人種差別主義の黒人観が<sup>(2)</sup>装いも新たに復活する。

「南北戦争によって南部は軍事的、経済的に敗北はしたが、その生命維持に必要な部分はそっくりそのまま残っていた。即ち、そのイデオロギーは軍隊の力によって潰されはしなかった。良き日を望みつつ、南部は、その征服地に占領軍を配置し、黒人を正面に据えた政治屋と軍人の前にひれ伏していた。<sup>(3)</sup>」

1880年代に黒人の市民権は大幅に制限されるようになるが、選挙権の剝奪は連邦政府の介入を招く恐れがあったし、黒人票は制御出来ると考えられていた。だから、黒人に対する南部の態度は基本的には差別主義で一貫していたが比較的妥協的であった。これは「大農園文学の伝統」が提示する黒人観および人種関係の規定と軌を一にする。

『アトランタ・コンスティテューション』の編集長であり、南部新興ブルジョアジーの代弁者であったヘンリー W. グレイディは「新しい南部」が必要とする黒人について、この年、次の様に演説した。

「私の父が奴隷の解放を阻止すべく南軍に入隊して戦闘している間、その夫がすごとく、私の母とその子供達の安全を守って母の寝室の戸口に睡り、侵入者を防ぐためには、哀れにもその生命すら捨てる覚悟であった、この頼

りになる奴隷の心に宿っていた、あの真実の魂が何よりも必要なのである。南北戦争中に、南部において黒人が守って見せた忠誠心は歴史上、他にその例を見ない。<sup>(4)</sup>」

彼は南部産業の発展には黒人の協力が必要であり、それには黒人の教育と政治への参加が保障されるべきだと考えていた。但し白人との関係は、この演説の引用部分が示す通り、奴隷制時代に、大農園主と家内奴隷との間に存在した、と彼が特に強調する主従関係を軸にした人種関係を守って、両者が争うことなく、調和した社会秩序を維持しなければならない、と主張するのである。この白人主人と黒人従者との関係のもとに、永遠に子なる黒人の面倒を永遠に父なる白人が見るのは一つの義務であるとし、「新しい家父長主義」を主唱するのであった。黒人が従者の地位に固定される限り、市民権は当然のこと制限されるのであり、選挙権の行使も制御され得るわけである。問題は黒人がそれに応ずるかどうかである。だが、グレイディは「大農園文学の伝統」が輝かしい文化形態の一つとして描く、白人と黒人の身分をわきまえた、満足すべき人間関係なるものを簡単明瞭に語っているといえる。

大農園主一族のノブレス・オブリージとロマンス、黒人従者や召し使いの献身と忠誠を描き、大農園制度を称讃したペイジの短篇集『古きヴァージニアにて』が出版されたのはこの年であった。

また、早くから『アトランタ・コンスティテューション』に黒人の歌や“アンクル・リーマス”の話を掲載し、同紙の編集スタッフとして、グレイディと黒人政策において同じ立場にあったハリスの短篇集『フリー・ジョー、その他ジョージアの小品』が出版されたのもこの1887年であった。

注(1) Jean Wagner, *Black Poet of the United States* (University of Illinois Press, 1973), p. 51.

(2) See George M. Fredrickson, *The Black Image in the White Mind*, Chapter Nine (Harper Torchbook, 1971).

(3) Jean Wagner, *op. cit.*, p. 48.

(4) Cited by George M. Fredrickson, *op. cit.*, p. 207.

ページの短篇集『古きヴァージニアにて』に収められた「マース・チャン—古きヴァージニアの物語—」は収録された6編の中で、ページの短篇の、技法とテーマ、素材と型の基本をなすもので、最も注目される作品である。

チャニング家の墓守りで、主人の残した老犬の世話をしている、老いた黒人サムは旅人に、主人と生死を共にした、過ぎ去った大農園制の一時期を語る。

少年の頃、サムは農園主チャニングに、生れたばかりの彼の息子を手渡され、この子が生きている限り、面倒をみるように依頼される。サムは若主人チャニング（マース・チャン）の従者として大邸宅に出入りする栄誉を与えられた。

「それは古き良き時代でございましたよ。サムが知っている一番いい時代でした。黒<sup>ネガ</sup>ん坊<sup>ガ</sup>供は何もする必要はなかったのでございます。ただ、馬を飼い、身体を洗ってやり、あとは御主人様がせよとおっしゃることだけしていたのでございます。<sup>(1)</sup>」

老主人は火事の現場から黒人御者を救い出して失明し、大農園は成長した若主人が引き継ぐことになる。

やがて南北戦争が勃発し、サムは出征するマース・チャンに伴われて北軍と戦うべく、戦場に出る。そして、少年の頃、二人で馬を駆って狐狩りをしたのように、サムは主人にくっついて戦場をかけめぐる。彼は昔、老主人にマース・チャンをよろしく頼むと、まかされたことを忘れなかった。

若主人はチェンバレン大農園のアン嬢に恋していた。ロムニィの戦いに勝利すれば、

「私達は故郷に帰って結婚しよう。……若し私が負傷したら、家に連れて帰<sup>(2)</sup>ってくれ。」

とマース・チャンは頼む。彼はアン嬢と、サムはその恋人、アン嬢の召し使



いジュディと結婚し、二人一緒に落着こうというのである。

ロムニの激戦で主人は倒れ、サムはその遺体を南部の軍旗で包み、馬車を馳せて故郷に連れて帰る。

老主人夫妻は悲嘆にくれ、相次いで他界し、心の傷を癒すべく陸軍病院に勤めたアン嬢もリッチモンド陥落後、病を得て帰郷し、ジュディの献身的な看病も空しく他界する。

マース・チャンの墓に寄りそえてアン嬢を埋葬したサムは妻のジュディと共に、今も四人の墓を守り続けている。

「マース・チャン—古きヴァージニアの物語—」のサム、「アंक・エディンバーグの溺没」のアंक・エディンバーグ、「マー・レディー戦争の物語—」のアंक・ビリー等を“古き良き時代”の生き証人として作品に登場させ、黒人の方言でそれを語らせる。つまり、黒人の眼と口と耳を借りて、白人の観点から、過ぎ去ってしまっただけの手がかりもない時期の、人種関係の良き面ばかりを一方向的に語るペイジの手法は語られる内容に一層真実味が加わり、読者を引きつけ、共感させ、さらに納得させるに充分だった。

政治で敗北した南部人には「口にするのもったいない恵み,」「少くとも文学の分野で、今や私達はチャンスをつかんだのだ。」<sup>(3)</sup>とこの短篇集が同時代の南部作家に与えた衝撃をルイジアナの作家、グレイス E. キングは感動の筆致で述べている。ペイジの短篇集の出版は「大農園文学の伝統」に新しい時代をもたらしたのである。

注(1) Thomas Nelson Page, “Marse Chan,” *In Ole Virginia* (The University of North Carolina Press), p. 10.

(2) *Ibid.*, p. 33.

(3) Cited by Kimball King, Introduction, *Ibid.*, p. ix.

ハリスの短篇集『フリー・ジョー、その他ジョージアの小品』に収録された5篇の作品のうち、「大農園文学の伝統」に依拠しながらもページとの相異を如実に示しているもの、「アント・ファウンテンの囚われ人」を取り上げてみよう。

ここに登場するトムリンソン大農園の忠実な黒人は女性であり、その献身の相手は若い女主人、ミス・レディである。

この召し使いの名は元来フリユ・エレンといったのだが農園主トムリンソンがファウン・テンと聞き違い、それ以来、アント・ファウンテンと呼ばれている。

アトランタ市からそう遠くはない故郷の町ロックヴィルを久しぶりに訪れ、南北戦争によって変わった街に、昔と変わらず、大きく枝を広げたセダンの木の下で、「私」はケーキを売っているアント・ファウンテンを見つける。

彼（私）はロックヴィル・ホテルのヴェランダで街の風景を懐かしんでいるが、「私のいるところから彼女が鼻歌をうたっているのが聞えた——それは昔、彼女がうたっていたのと全く同じ調子のものであったが。」<sup>(1)</sup>

彼がこの町に来たのは商用があつてのことだが、外に確かめたいことが一つあつた。彼は数年前、地方紙の一隅に、フェリス・トルニオンという人の名で、トムリンソン大農園のジャージイ酪農場が注文をうけた“極上のバター”はロックヴィルのドラッグストアで販売するから、早目にどうぞ、という広告めいた一文が掲載されているのに気づき、トムリンソン家の変遷とトルニオンなる人物について知りたく思っていた。それは南部人として、つぎのような感慨があつたからである。

「私は戦争が幸運な結果をもたらしたことをとても喜んでいて、白人と黒人を共に奴隷制が及ぼす恐ろしいわざわいから解き放つたこと、また戦争が資源の開発をすばらしいほど可能にしたことの真価を十分に認めたいが、ト

ムリンソン大農園が酪農牧場になったのを知って遺憾に思っていることも告白せざるを得ない。<sup>(2)</sup>」

彼はアント・ファウンテンにトムリンソン家の出来事とフェリス・トルニオンという人物について話を聞くことになる。

トルニオンは彼女が選り出した初めての白人男性だという。その意味がつかめないでいる彼に彼女はつぎのような言動をする。

「ここでアント・ファウンテンはたっぷりと大声で笑うのであった。彼女は明らかに私が何も知らないのをとても面白がっているのであった。

『こんなに笑っちゃいけないわねえ。娘の頃から今日まで、こんなに腹の底から存分に笑ったことはなかったのよ。ロウワン・トムリンソンの御主人が私の名前をお聞きになった時以来だわ。私の名はフリュウ・エレンでございます、と申し上げてるのに、ロウワン御主人は死んだ馬みたいにつんばで、え？ と聞かれるので、フリュウ・エレンでございます、ってたら、ロウワン御主人は、ファウンテンか！ はっ！ 奇妙な名前だな、っておっしゃるのよ。私しゃ大声上げて笑ったの。そしたらみんながどうして叫び笑いをしてるんだと尋ねるの。だから私しゃいってやったの、ロウワン御主人が私の名をファウンテンと呼ぶんだと。あのねえ、そのときから今日まで、フリュウ・エレンじゃなくて、私しゃファウンテンという名になったの。私しゃ名前が変わったんでそのとき腹の底から笑ったの。今笑ったら馬が走り出して、馬車をひっくり返して、私しゃその下じきにされるからおっかなくて。』

『それはそうと、このトルニオン氏のことは？』と私はいった。

『あーら、まあ！』とアント・ファウンテンは叫び……<sup>(3)</sup>」

これは彼と彼女が馬車でトルニオン宅へ向う途中の話であるが、この黒人女性ハリスの眼に映った典型的な黒人である。彼女は大笑いするので馬車がひっくり返るかも知れぬと自らいう。その上、この喋りぶりは単にお喋りの域を越えている。トルニオンについて尋ねたら、その回答がこれである。即ち、黒人は長々と喋りまくるが要領を得ないというのである。誰れかが制御しないと

その脱線ぶりはひどくて納まらない。ハリスは黒人とはそんなものだ、とここで具象してみせるのである。

さて、トルニオンがアント・ファウンテンの囚われ人であることが、やっと語られることになる。

トルニオンはシャーマン將軍の軍隊がジョージアを侵攻した際にトムリンソン大農園に迷い込み、負傷した北部人である。彼を救いトムリンソン邸宅に連れて行ったのがアント・ファウンテンであった。4年続いた戦争でこの大農園は衰退し、トムリンソン判事は精神的打撃をうけたのか、年のせいか健忘症気味であった。トムリンソン夫人は負傷した北部人をトウモロコシ倉へ置いて面倒をみようとしたが、令嬢のミス・レディが邸宅に入れて看病するように取り計らった。彼女がいうには、南部人やジョージアの若者が北部で負傷したら、彼等も身を寄せる所が欲しかろうから、この北部人にも同じ気持で接すべきだと。トムリンソン一族はクリスチャンなのであった。

このトルニオンという北部人は立派な若者であって、トムリンソン判事の気に入り、不思議と彼の記憶は蘇るのであった。

南部は敗北し、トムリンソン家は没落する。トルニオンは世話になった分を働いて返すと黒人達と共に労働にはげみ、その後、大農園を立ち去る。ミス・レディはトルニオンが好きであつたらしく、彼が居ない没落した大邸宅で淋しげであった。彼と共に働いたことのあるアント・ファウンテンは彼がミス・レディに心を寄せているのを知っていた。そこで、この黒人の召し使いは二人が結びつくことは間違いなし、と読んでミス・レディにトルニオンをトムリンソン大農園に呼ばぬようなら、もうここでは仕えたくても自分にはする仕事がない、とうまく彼を迎えるチャンスを作る。

フェリス・トルニオンは二人乗りの馬車を駆ってトルニオン大農園にやってくる。

彼はミス・レディと結婚し、その広大な土地にパーミュエダ草を植え付けて酪農用の牧場に変え、乳牛を飼って事業に成功する。

ブルジョア精神の持主である北部人、フェリス・トルニオンは南部貴族精神豊かな淑女、レディ・トムリンソンと結婚し、奴隷制大農園を大酪農場に変えたわけである。二人の間には男の子がいて、その名はアディソン・トムリンソン・トルニオン、Addison Tomlinson Trunion、即ち True Union 真実の結びつきによって Add された、つまり生れた子なのである。

ハリスはこの作品をつぎの言葉で結ぶ。

「人はただ心大きく、生氣あふれるアメリカ人であることによって、北部人<sup>(4)</sup>でもあり、南部人でもありうる。」

北部人フェリス・トルニオン、南部人レディ・トムリンソン、そしてその子アディソン・トムリンソン・トルニオンはアメリカ人の典型なのである。そして彼等が白人であることに注目しなければならない。

では黒人は何だとハリスはいつているのか。それは明白である。日進月歩の時代に、昔と少しも変ることなく、ロックヴィルの町で、相も変わらずジンジャー・ケーキとパーシモン・ビールを売っている、大声で笑い、鼻歌をうたい、陽気で満ち足りたアント・ファウンテンがその典型だとハリスは描くのである。変わったところは髪に白髪が増えているだけなのだ。

この点では、ハリスよりも黒人嫌いであったペイジの作品「老いた狂人」には、たとえこれらの人物が主たるテーマではないにしても、解放後に夫婦で勤労し、土地を購入する黒人が描かれていて、意図せぬところにリアリズムの作用が現われた作品として注目に価する。

ペイジは主家に献身的で、忠実であった“オールド・タイム・ダーキー昔の黒ん坊”だけを称讃し、この“黒ん坊”を生み出した大農園制が崩壊した後では“古き良き時代”を体験的に知っていて、これを懐かしむ老いた黒人に憐れみの情を示したが、それ以外の解放後の黒人は「怠惰で、儉約心がなく、節制を欠き、無礼で、不正直で、<sup>(5)</sup>道徳のかけらもない。」とひどく嫌悪していたのである。

ハリスは大農園主に忠実な黒人を描きつつ、新しい時代をうみ出す上で黒人が果たした役割を、気恥かしいほどの狭い範囲に限ってではあるが触れもし



た。また、黒人を虐待する大農園主を描いて、黒人に深い同情を寄せもした。それはページとハリスの育った社会階層の相異がもたらす黒人観の違い、ものを見る眼と気持の相異によるのであろう。

しかし、黒人は生れ付き劣等であると考えている点では一致している。

注(1) Joel Chandler Harris, "Aunt Fountain's Prisoner," *Free Joe* (The Gregg Press), p. 79.

(2) *Ibid.*, p. 78.

(3) *Ibid.*, pp. 81-82.

(4) *Ibid.*, p. 98.

(5) Cited by George M. Fredrickson, *The Black Image in the White Mind* (Harper Torchbook, 1971), p. 260.

## 4

ハリスの描く黒人はアント・ファウンテンのように、笑って陽気であるか、フリー・ジョーのように笑わず悲しく、幼稚で、子供のような創造物なのである。この相異は簡単な原因に帰されている。それは、仕えるべき主人がいるか、いないかによる。

「フリー・ジョーと外の世界」はそれを明示している。

彼はこの作品で、黒人をポーカー・ゲームの景品にする判事と奴隷商人、ジョーの妻を売却して彼を痛めつける大農園主、不幸なジョーの相談相手になる貧しい白人兄妹等、白人側の世界を描くに際して、大農園主側にある者達の冷酷さ、軽薄さとその側にはいなかった貧しい白人の持つ人間味に光を当てて、大農園制そのものに批判の眼を向けている。

この点では、大農園制に、たとえ悲しい出来事があったにせよ、栄光の面しか見なかったページの文学とは質的に異なるものを持っている。ところが黒人側を描くとき、そこには「大農園文学の伝統」の担い手として、ページとは全く異なるところのない黒人観が現われる。

「奴隷達は毎日、大声で笑うのに、フリー・ジョーはめったに笑わなかった。奴隷達は仕事中に歌い、寄り合いで踊ったが、フリー・ジョーが歌ったり、踊ったりするのを見たり聞いたりした者は一人もいなかった。」<sup>(1)</sup>

奴隷制下に暮らしているにもかかわらず、黒人達はいつも笑って、歌って、陽気に生活している、という一面的で一方的な見方は「大農園文学の伝統」の始祖とされるジョン・ペンドルトン・ケネディの『スワロー・バーン』（1838年）に出て来る。奴隷制の悪質な面を見極めるために、ヴァージニアを訪れた北部人、リトルトンが奴隷制は黒人にふさわしいものであると感心する。黒人が満足して暮らしている様子を彼はつぎのように述べる。

「かなり年寄りになると別だが、私の出会った黒人の男達は皆んな口笛を吹いているし、女達は朝から晩まで歌をうたっている。」<sup>(2)</sup>

ジョーが笑わず、歌わず、踊らないのは何故か。彼は奴隷の身分から解き放たれ、自由の身になってしまっフリーて、仕えるべき主人がいないからである。そして、これに付随して生じた不幸は白人社会が自由黒人に向ける猜疑の眼と奴隷仲間による村八分であった。彼は悲しいことに、奴隷である妻ルシンダと引き離されたが、これは克服し得るものであった。彼はルシンダと逢い引きすることが出来たから。妻の顔を見たくて、奴隷小屋に近づくと、

「黒人小屋の裏戸から、夜、コールドーウッドの黒人達が歌うのが聞え、時々、ルシンダのかん高い声が外の声にまじって、ひときわ高く聞こえるような気がした。」<sup>(3)</sup>

小犬のダンは主人の心を察したのか、ルシンダを導いて彼の待つポプラの木の下に連れて来る。ところが

「しばらくして、黒人達がルシンダとフリー・ジョーが森で逢っているのを見つけ、この知らせがコールドーウッドの耳に入った。」<sup>(4)</sup>

激怒した彼はルシンダを遠くの町へ売り飛ばしてしまう。ジョーは親しくしている、貧しい白人兄妹のところへ、ルシンダの居所を占ってもらいに行き、同情した二人に妻が売られたことを教えられるが、その事実が呑み込めない。

ルシンダの小屋へ行ったダンはコールドーウッドの猟犬に咬み殺されて帰って来ない。自分の小犬を追い廻す猟犬の吠え声を聞いて、彼は狐を追い廻す猟犬の姿を牧歌的に思い浮べる。

彼は毎夜、ポプラの木の下で妻とダンを待ち続ける。そして秋の深まった或る朝、微笑をたたえて死んでいるジョーが見かけられる。

恐らく、小犬にまつわりつかれてやって来る妻の夢でも見ていたのであろう。

ハリスは作品の終るところで、並み並みならぬ同情と憐れみをフリー・ジョーに注いでいることは否めない事実である。しかし、このジョーという黒人像が読者に与える印象は悲しくなるほどの頭の悪さ、馬鹿らしいほどの純朴さと滑稽なほどのだらしなさである。

この作品には、黒人は主体性がなく、自律性もなく、創意工夫に欠け、他者(白人)の助けなしに日常の暮らしすらおぼつかぬ幼稚な人間であるという考えが見えている。

ルシンダは夫と引き離されているのに、ひとときわ陽気に歌っているようである。ハリスはこの黒人達の歌に、悲しみや抗議や怒りがこめられているようには描いていない。

貧しい白人はジョーに同情するが、黒人達は同情するどころか自由の身になったジョーをねたんで「機会ある毎に傲慢無礼に扱<sup>(5)</sup>い」農園主に密告までする。彼等は所有主には忠実であり、献身的であるが黒人間では思いやりがなく、相互扶助の心もなく、人間性に乏しいとハリスは言外に述べている。

彼が“父なる白人”が“子なる黒人”の面倒を見るという、グレイディの「新しい家父長主義」にもとづく「新しい南部」づくりに同調し得た素地はここらにあるのではあるまいか。

注(1) Joel Chandler Harris, "Free Joe and the Rest of the World," *Free Joe* (The Gregg Press), p. 2.

(2) Cited by Sterling Brown, *The Negro in American Fiction* (Arno Press

and The New York Times), p. 19.

(3) Harris, *op. cit.*, p. 9.

(4) *Ibid.*, p. 10.

(5) *Ibid.*, p. 8.

## 5

ペイジとハリスの短篇集が出版された年はチャールズ W. チェスナットが主要な月刊誌『アトランティック・マンスリー』に「呪われたぶどう園」を寄稿し、作家活動の足場を固めた年でもあった。だが、その頃には短篇に描かれる黒人は既に型にはまったものになっていた。

しかし、彼は同じ文学型式、短篇に依拠して黒人側の黒人の人間像を構築し、形象化することによって、白人作家達が流布させていた、白人側の黒人像と対決していった。

1880年代は年を追って黒人の選挙権と市民権がひどく制限される方向に進んでいた。政治・経済上の妥協のために、南部の黒人問題に眼をつぶって胸苦しかった北部の人々には“古き良き時代”の物語や保護者たる白人がいる限り、黒人はフリー・ジョーのように悲しまず、アント・ファウンテンのように陽気に暮らす子供っぽい人間である、といった話は溜飲をさげるのに都合がよく、北部の良心は慰められるのであった。

「黒人の抑圧と選挙権の剥奪に平行して行われたものが、トーマス・ネルソン・ペイジの大農園文学派とトーマス・ディクソンの人種差別派による黒人のゆがめられた描写であった。」<sup>(1)</sup>

1880年代の「大農園文学の伝統」に立つ南部作家達は

「黒人は生れ付き劣等であり、南北戦争前の封建的な社会の定めに満足していた、という南部の理論を伝播させたのは、もっぱら南部作家達であった。」<sup>(2)</sup>

といわれるほどである。ディクソンが登場するのは1890年代の悪化した黒人排外と差別の風潮を担って、彼が小説を書くことになる、1900年代であるから、ここでは触れないことにする。

さて、ペイジとハリスの短篇集が出版された3年後の1890年6月にチェスナットはケイブルに送った手紙で、

「トス N. ペイジ、H. S. エドワーズ、それにジョエル C. ハリスは楽するよりもわざわざ苦労したが、感傷的で、献身的な黒人を描いている、<sup>(3)</sup>」  
ことを指摘すると共に、

『ザ・センチュリー』の寄稿欄が世間に伝える善良な黒人及びその美徳なるものは（貴殿の創作されたものを除いて）純血の真黒な肌をした黒人の昔の主人に対する犬のような忠誠と献身である。<sup>(4)</sup>」

と述べて、これらの作家やジャーナリズムに対して批判的な立場にあることを伝え、さらに彼等の称讃する黒人の行為や徳目に触れ、

「私はこの種の美徳は決して人間の榮譽とは見なさない。<sup>(5)</sup>」

と言明し、黒人作家として彼等とは異なった価値観を持っていることを明確にした。

だが、チェスナットの作品がまとめられ、短篇集『若き日の妻、その他カラー・ラインに関する物語』となって出版されたのは、19世紀も終らんとする1899年のことであった。

ここに収録された9篇のうち、「花束」と「グランディソンの越境」を選んで「フリー・ジョーと外の世界」と「マース・チャン—古きヴァージニアの物語—」が描く黒人像との質的な相異に注目してみたい。

「花束」は黒人少女ソフィ・タッカーが、人種隔離の障壁に幾度もぶつかりながらも、一匹の犬の助けを得て、遂に敬愛していた白人の先生、メアリー・マイローバーさんの霊前に一束のバラの花を献ずる話である。

メアリーは大農園主の娘であったが戦争で没落し、苦しくなった家計を補うために、召し使い以外の黒人との接触を嫌う母の反対を制して黒人学校の教職につくが、病弱であったために2年目の学期が終る頃、他界してしまう。

彼女は在職中、彼女を慕い、献身的に手伝いをしてくれる生徒の一人、ソフ



ィに親しみを感じ、自分が死んだら、花咲くバラの茂みにおおわれた墓に眠りたい、とふともらす。

ソフィはこの言葉を忘れずにいて、小さなバラの花束をもってマイローバー家を訪れるが献花を拒絶される。

先生の柩を先頭に、教会に向う弔客の列の後にくっついて教会まで来るが、教会の入口では受付が言葉巧みに黒人の参列を断っていた。葬儀に加われず、献花も出来なかった彼女は弔客の後にくっついて埋葬式の間行われる墓地へ行くが、この墓地の門にはつぎのような掲示がされている。

「『注意。ここは白人専用の墓地です。他の者は立ち入らないで下さい。』」

ソフィはマイローバー先生の懇切丁寧な教育のおかげで、誤る余地もなくこの掲示を読むことが出来た。<sup>(6)</sup>

彼女は鉄柵の囲いの外で、萎れ始めたバラの花束を手に、とぎれとぎれに聞えてくる牧師の弔いの言葉を、静かに涙しながら聴いていた。

やがて埋葬式も終って人は去り、墓地の門は閉される。盛り土され、花でおおわれた先生の墓をぼーっと見ていたソフィの悲しい瞳に、小さな白いものが動いて見える。彼女の顔に明るい輝きが浮ぶ。白いものは先生の飼犬で、よく教室までついて来たプリンスであった。

「『プリンス！ ここへ来て！ プリンス！』と彼女は呼んだ。小犬は起き上り、門のところへちょこちょこ走って来た。ソフィはその可哀そうな花束を鉄格子の間から押し込んでいった。『これをメアリー先生のところにもって行ってちょうだい、いい子だからね。』」<sup>(7)</sup>

犬はソフィの頼みを聞いてくれた。彼女は読み書きを教えてくれた、敬愛するメアリー・マイローバー先生の霊前に、先生が好きだといったバラの花を一匹の犬の助けを得て供えたのである。

差別の壁に隔てられながらも人間として、白人と対等に、悲しくともひるむことなく、墓地の鉄柵の外から、亡き先生の葬儀に参加して行った、この心や

さしく利巧な黒人少女と、彼女の先生に対する敬愛をチェスナットは誠実さと献花とに区分して、ペイジの描く、死後も主人の墓を守って動かず、主人の残した犬にも仕える黒人サムと、彼の主人に対する「犬のような忠誠と献身」に対処させている。

ソフィは非常に慕った師を失って悲しんだが、ハリスの描く黒人ジョーのように主人を失って、自己解体的に悲しまない。彼女は悲しみを記念し、意義あらしめ、制御し、主体的に行動するのである。

ジョーやサムに人は感傷の涙を流し、それで満足することが出来よう。だがソフィに対しては同情するだけでは済まされない。何故なら彼女は白人の従者ではなく、また白人の保護者など用のない対等の人間として立ち現われ、差別観念と社会の差別構造を照射するからである。

注(1) Hugh M. Gloster, *Negro Voices in American Fiction* (Russell & Russell, New York, 1947), p.7.

(2) Jean Wagner, *Black Poets of the United States* (University of Illinois Press, 1973), p. 69.

(3) (4) (5) Excerpts cited by Frances R. Keller, *An American Crusade: The Life of Charles Waddell Chesnutt* (Brigham Young University Press, 1978), pp. 209-210, pp. 215-216.

(6) "The Bouquet," Charles W. Chesnutt, *The Wife of His Youth* (The University of Michigan Press), pp. 287-288.

(7) *Ibid.*, p. 289.

## 6

「グランディソンの越境」はオウエンス大農園の若主人ディクの北部旅行に際して、その従者に選び出された、この大農園随一の忠実な奴隷グランディソンが一体、誰れと何に忠実であったかを語る作品である。

オウエンスの息子ディクは学問もあり、ハンサムな青年であるが、熱情と気力に乏しく恋人チャリィティ・ロマックス嬢の心をつかむことが出来ないでいる。彼女は奴隷州に育った女性であったがクエーカー教徒であった祖母の影響

もあって、虐待される奴隷を見てひどく憤慨している。数年前、奴隷の逃亡を手引きして発覚し、服役中に病死した一青年がいたが、彼女はこの種の青年を英雄とみなし、尊敬するのであった。

ディクは彼女の歓心を買うために、オウエンス所有の奴隷を一人、密かに逃がすことにする。彼は一番逃げそうな奴隷トムを伴って北部へ旅行すれば、自分は責任を問われることなく目的を達しうると判断した。

父親は息子の北部旅行に賛成するがトムの同伴を許さず、代りに、逃げる心配のない、最も信頼の置ける、忠実な奴隷グランディソンを従者としてあてがう。

ディクは少々落胆したが、長い旅の道中に策を講ずることにする。彼は特に奴隷廃止運動の盛んな地域を選んで滞在しつつ、ニューヨークへ、ボストンへと旅したがグランディソンは忠実に主人に仕えて逃げる気配は微塵もない。ディクは最後の手段として国境を越えてカナダに入り、ここは自由の地であって、逃げて捕えられない旨、グランディソンに話す。グランディソンはおどおどしてつぎのようにいう。

「河の向うへもどりましょうよ、ディクの御主人様。こんなところで御主人様とはぐれたらもう私の仕えるべき御方はいなくなりますし、それに故郷へ帰ることも出来ませんので、私はもう恐しくて。」<sup>(1)</sup>

ディクはこの男につきまとわれていてはチャリィティを得ることが出来ぬので、業を煮やした彼はこの地で逃亡奴隷の救援活動を行っている者に連絡を取り、グランディソンを置き去りにして一人ケンタッキーへもどって来る。

チャリィティは感激してディクと結婚する。グランディソンに裏切られたと知ったオウエンスは激怒するが後の祭りであった。

ところがある日のこと、日焼し、泥まみれになり、疲れ切ったグランディソンが

「背をしっかりと北極星に向け、信じられないほどの困難に耐えながら、懐しい大農園へ、主人のもとへ、仲間のところへ、我が故郷へと、」<sup>(2)</sup>

もどって来る。

オウエンスはこの忠実極まりないグランディソンの美德を  
「シムズ氏もその他の南部の作家達も書き立てるべきだ。」<sup>(3)</sup>

と大いに感動し、グランディソンを特別に優遇することになる。

ところがある日、グランディソンは姿を消す。彼の両親も兄弟も妹も妻も叔父も叔母も消えてしまっている。彼は家族達を引き連れて逃亡したのであった。

追跡隊が召集され、奴隷狩りが開始されて、時々彼等を追いつめるが地下鉄道組織が介入しているらしく捕えられない。

遂に彼等をエリー湖の南岸まで追いつめるが一足遅く、彼等に乗せた小型蒸気船が赤い尾灯をこちらに向け、カナダへと波を蹴って出るところであった。船上にはグランディソンがつっ立っていて、彼が指さす方を見ると、乗組員の一人がオウエンスに向かって盛んに別れの手を振っているのがあった。

グランディソンは奴隷制の鉄鎖につながれている間、奴隷所有主と接触する場合には、支配—被支配の型にはまった振舞いをしていた。それが大農園主オウエンスの眼には骨の髄まで“忠実な奴隷”に映じたのである。これは支配—被支配関係における支配者側の映像である。しかし、被支配者側にとって、それは支配者に忠実な奴隷なのではない。それは冷酷な抑圧と搾取の世界において、自由を獲得する機会をうかがい、また家族、親族、仲間、つまり自己の帰属する集団への圧迫を緩和させるための“忠実な奴隷”の演技者なのである。

この種の演技は黒人文化が生んだ生存のための防衛行為、黒人社会学用語を使えば *adaptability* (適合能力)<sup>(4)</sup> の一つ、つまり抑圧下における生活手段の一つであって、そこに黒人の全人的行為、人格、ヒューマニティ、人生そのものを探しても無駄である。

グランディソンの人生は奴隷にされた黒人側に存在しているのであって、彼の人格、ヒューマニティはこの側に立って探らねばならない。彼は人間は生

れながらにして平等であり、自由と幸福は一人で利己的に享受すべきものではないという理念を行動で具現したのである。彼は演技とはいえ敢えて屈辱に身を置き、だらしのない忠実な従者として選び出され、ディクの御主人様に仕えて旅をした。そして再び奴隷農園にもどって来て報賞される。グランディソンはカナダへの道順を調べ、奴隷解放運動家の協力を取りつけ、故郷に仲間を迎えに帰って来たのである。これは敵対する差別社会を舞台にした生命がけの演技でもあった。

彼が演技者の仮面と衣装をかなぐりすてて、家族と親族を引き連れて、奴隷狩りの猟犬に追われ、武装した残忍極まりない追跡隊をふり切って、自由の地をめざすとき、そこに真の黒人、グランディソンの姿があった。

彼は奴隷として虐待されたが、オウエンス一族の誰れにも危害を加えず、報復もしなかった。足手まといの身内をつれて、ただひたすらに異境カナダをめざして突き進んだのだ。

小型蒸気船に乗って岸を離れた時、彼等の仲間の一人は盛んに別れの手を振っていた。そこには弾圧下に解放運動にたずさわった者達の、また抑圧下であって鍛練された、たくましい人間精神を持った者の、自信と大らかさと決意の強さがある。

ハリスは主人に忠実で仲間を裏切る黒人、奴隷制に満足している黒人等を描いた。ペイジは自ら自由を放棄し、奴隷であることに誇りをもっている黒人を描いた。そして、これを称讃もし憐れみもした。これは白人側の一方的、一面的黒人描写であり、多くは虚像であるにすぎぬことをチェスナットは同じ文学型式、短篇によって明らかにしたのである。

注(1) “The Passing of Grandison,” Charles W. Chesnutt, *The Wife of His Youth* (The University of Michigan Press), p. 191.

(2) (3) *Ibid.*, p. 199.

(4) Robert Staples, *Introduction to Black Sociology* (McGraw-Hill Book Company, 1976), p. 76.



チェスナットの短篇集『若き日の妻、その他カラー・ラインに関する物語』は1899年12月にヒュートン・ミフリン社から出版された。

『ザ・ニューヨーク・メイル & イクスプレス』紙は、この作品集の価値は、黒人を一個の人間として、読者に考えさせるところにあり、その点で、従来の黒人描写と決別する新しい門出をもたらしたところにある<sup>(1)</sup>、とその意義をたたえた。またウィリアム・ディーン・ハウエルズは翌年の5月、『アトランティック・マンスリー』で、作品が関心と呼ぶのは人種問題を取り扱っているためではなく、作品の持つ優れた芸術的技法によるものである点を指摘し、チェスナットの芸術家としての才能を高く評価した。<sup>(2)</sup>

しかし、チェスナットも予期した如く、南部文学界からの批評はひどいものであった。ナンシー・バンクは『ブックマン』誌で、「若き日の妻」1篇だけを黒人でなければ書けぬ性質のものであるとして、恩恵的な評価をしたが、他の8篇はこれと比較する値打もないと酷評した。その理由は兩人種の間における、殆んど触れることも不可能な情感的基盤というものに、軽率に触れているばかりか、危険で、陰うつな人種問題に文才もなく、趣味悪く、慎みもなく触れているからだ、<sup>(3)</sup>というのである。

彼の作品は一部の知識人に評価されたが、一般の読者の関心を引くものではなかった。<sup>(4)</sup>

1890年代の中頃に、詩人として文学界に現われ、やがて短篇と小説の分野でも活躍した若い黒人作家が当時チェスナットをしのぐ名声を博していた。それがポール・ローレンス・ダンバーであったことは周知の通りである。この黒人作家は詩、短篇、小説の各分野で「大農園文学の伝統」を継承する作品を数多く発表し、出版社に歓迎され、読者によるこぼれているのであった。

ここではチェスナット、ハリス、ペイジと同様に短篇に限って考えることに

するが、彼の作風を代表するものは1900年に出版された短篇集『ギデオンの強さ、その他の物語』の当初に収録された「ギデオンの強さ」であろう。

ストン大農園の奴隷キャシィは妊娠中、説教師ルシアスがミデアンの大軍からユダヤの民を守った信心深い勇者ギデオンと彼が率いる軍勢の活躍を、信仰の力の賜物として説法した際、彼女は法悦にひたって失神した。そこで、数日後に出産した男の子をギデオンと名づけた。

胎教の効果は少なくともこの子に限って間違いなく現われたのであろう。彼は他の子供と違って信仰深くストン大農園の模範少年となり、ストン老主人に信頼されて、大邸宅への出入りを許される。

青年となった彼は日曜学校の指導者となりやがて聖歌隊にいたマーサという若い女性と愛し合う。二人の将来をストン老主人に打ち明けると彼は神にも主人にも忠実なギデオンに一軒の家をもうけ大邸宅の近くに住めるように取り計らおうと約束する。そしてストン主人はつぎのようにいう。

『若し私がある日姿を消したら——』……『つまりだね、私が他界したら——私は逃亡したりしないから警戒しなくていいんだが——私はお前に若主人が母とエレンの面倒を見る助けになってもらいたいんだよ、分るね？これがお前に守ってもらいたかった一つの約束事なんだよ——どんなことがあっても女達を守ってやっておくれ。』<sup>(5)</sup>

ギデオンは約束する。

ギデオンとマーサが仕合せな婚約の時期を楽しんでいるとき、南北対立の暗雲はたれこめ、遂に戦争が始まった。大農園の前途を心配しながら老主人は他界する。

戦争が激しくなるにつれて奴隷の間では解放の噂が広がり、胸に子供をだいた女達は自由の到来を願って深夜密かに祈るのであった。だが

「心の底から彼等は自由の到来を祈ったが老いた女主人や若主人達の心を傷つけるような言葉はただの一言も口にはしなかった。」<sup>(6)</sup>

やがて若主人ダドレイ・ストーンは老いた母と妹を残して出征する。そして女主人達はギデオンの手に委ねられる。

結婚の日が迫るにつれてマーサの自由を求める精神は強くなる。彼女は結婚を2年延期する。自由の身になる機会は近づいているのであった。南部敗北の色が濃くなり、たびたび北軍がストーン大農園でキャンプを張った。そのたびに奴隷達は逃亡し、あるいは北軍に加わっていったがギデオンの心はびくともしなかった。彼は約束通り女主人達を守ることにしていたから。皆んなそれは愚かなことだといひ出した。解放の日はどこにとどまってもやって来るに違いないのである。女主人でさえそういった。しかしギデオンは動かなかった。彼の心がひどく乱れたのは恋人マーサが看護婦助手となって北軍に加わることになり別れの日が近づいたときだった。

キャンプをたたんだ北軍は隊列を整えストーン大邸宅の前を通過し、その後自由を求める黒人の一団が続く。これを見送って一人たたずむギデオンのところへ、マーサはかけもどって来る。

『来てちょうだい、ギデオン』と彼女は嘆願した。『私のために。ああ、どうして一諸に行かないの——自由になれるのよ。』彼は彼女に口づけして首を振った。『ここを離れることがあったら、来て私を探し出してちょうだい。』と彼女は痛々しく泣きながらいった。『ギデオン、私はあなたを愛しています。でも私は行きます。ほら、あの向こうに自由があるのよ。』そういって彼女は北軍と共に去って行った。<sup>(7)</sup>

彼は思わず一步を踏み出すが、ふり返って見た大邸宅からギデオンを呼ぶエレン嬢の声がする。彼は北軍とマーサの加わった黒人の一団が丘の向こうにかくれ、軍樂の太鼓のひびきが消えるまで、じっと見送っていたが、やがて大邸宅の方へもどって行くのであった。ギデオンは約束を守ったのである。

彼はここにトーマス・ネルソン・ペイジ流の黒人を描いたが、そこには密かに黒人の自己主張が織り込まれているのを見落してはならない。奴隷制時代に

よく働いた黒人、主人に忠実であった黒人に対して、白人はもっと真剣に、誠意をもって報いるべきではないかと。

彼はこの作品でペイジとハリスが描けなかった黒人女性マーサを描いた。ただダンバーは彼女を主人公にすえるのをさし控えたのである。

この短篇集にはチェスナットの「グランディソンの越境」と比べられる作品「恩知らず」が収録されている。これは「スリー・フォークスの悲劇」と並んで黒人の側からはもっともいい二つの作品といわれるものである。この作品は、主人レックラーに、利己的ではあったが善意で、法を犯しながらも読み書き計算を教えられた奴隷ヨシユアが、その知識を利用して通行証を偽造し、汽車に乗ってうまく南部を脱し、カナダへ逃がれた後、仲間を救うべく北軍に参加して南部へ侵攻してくる、というものである。

しかし、ダンバーはチェスナットの如く「大農園文学の伝統」が流布する偏見にみちた黒人像と正面から、直接的に対決することを避けている。彼はヨシユアを一応恩知らずの範ちゅうに入れて白人読者の怒りを緩和させ、レックラーも元来ヨシユアを自由の身にしようという気持ももっていたので、ヨシユアの行為に悪態をつくものの、物心共にそれほど打撃はうけなかった、として読者にわだかまりが残らぬよう配慮している。

彼は「古き良き日のクリスマス」で北部に移住した黒人に対する差別と排外を描きはするが、それが直ちに、南部の大農園時代の懐しい回顧となる。

彼はよく非難されるように、富と名声を求めて出版社と読者に迎合したのかも知れない。1898年から1904年、26歳から32歳までの6年間に四つの短篇集と四つの小説が出版されている。本来詩人として知られる作家である。如何に人気があったかがうかがえよう。しかし、彼が同時代の要求に応じたのは、「自分の民族を助けたい一心に、同時代の他の多くの黒人（好戦的であった W. E. B. デュボイスも含めて）が、アメリカにおいて黒人はアメリカ白人の友情ある助けを確保しなければならないのだと信じていた。」<sup>(8)</sup>が、彼もその一人であったのだろう。

「ダンバーは大変よく売れた多くの小説と詩を書いた。しかし彼の心には致命的に葛藤があった。彼はそれをまぎらわせ、溶解させようと大酒をあおったが駄目だった。彼は私達に彼が本当に感じたことをほんの少ししか語ってくれなかった……」<sup>(9)</sup>とリチャード・ライトは述べている。

彼は白人社会の反感を強めることを恐れたのだといえる。

この時期の黒人が置かれた暗澹たる状況はフランクリン・フレイジアが「南部において黒人を『それ相応の地位に』置くべくリンチ殺人と集団暴行が行われた1890年から1915年の四分の一世紀間に、黒人達はアメリカの生活で自由と平等を望むのを諦めた。」<sup>(10)</sup>と述べたほど悲惨なものであった。

1890年代に激化したいいがかりによるリンチ殺人、黒人による白人女性の暴行といういいがかりによる血の制裁は黒人の選挙権を剝奪し、市民権を蹂躪して政治、経済面で搾取、収奪し、さらに社会生活においても黒人を隔離し屈従させるための脅迫手段であった。このリンチ殺人を正当化するために、黒人は抑制出来ぬ性衝動をもち、生れ付き犯罪者の性格を有する“獣”であるという観念が流布されるのは1890年代の終る頃からである。1898年、ページの小説『赤い岩』が出版されるが、彼はそこにモーゼという黒人政治家を、白人女性を狙う黒い獣として登場させるのである。そして1900年にチャールズ・キャロルの悪名高い『黒人野獣論』<sup>ザ・ニグロ・ア・ビースト</sup>が出版され、20世紀に入って間もなく、黒人憎悪の代表作家トーマス・ディクソンが登場して来る。人気作家ダンバーは1906年、36歳で病死するが、時代に受け入れられなかったチェスナットは短篇の限界をも痛感し、小説という文学型式に依拠して、新たに歪曲されて創出される黒人像と対決し、社会批判を行うと共に、論陣を張りさらに活潑な社会行動を取るようになる。

注(1) Frances R. Keller, *An American Crusade: The Life of Charles Waddell Chesnut* (Brigham Young University Press, 1978), p. 163.

(2) *Ibid.*, p. 164.

(3) *Ibid.*, p. 165.



- (4) *Ibid.*, p. 166.
- (5) Paul Laurence Dunbar, "The Strength of Gideon," *The Strength of Gideon and Other Stories* (Arno Press & The New York Times), p. 16.
- (6) *Ibid.*, p. 17.
- (7) *Ibid.*, p. 23.
- (8) Darwin T. Turner, Introduction, Paul Laurence Dunbar, *op. cit.*, p. ii.
- (9) Richard Wright, *White Man Listen!* (Doubleday Anchor Book, 1957), p. 82.
- (10) E. Franklin Frazier, *Black Bourgeoisie* (Collier Book, 1962), p. 22.

付記 この原稿は英米文学研究者の同人雑誌『文学と評論』第12号(1979年6月号)、  
〈発行所 宇治市五ヶ庄広岡谷2ノ170 文学と評論社〉に寄稿した論文「チャールズ  
W. チェスナットの使命——黒人イメージの創造——」にポール・ローレンス・ダ  
ンバーを加えて書き改めたものである。